

◆しょうけい館（戦傷病者史料館）

「昭和 100 年」関連施策実地レポート

このコーナーでは、内閣官房「昭和 100 年」関連施策推進室の室員が、各地で開催されている関連施策を訪問し、感想を含め皆様へご紹介します。

今回の訪問先は、しょうけい館（戦傷病者史料館）です。

令和 8 年度夏の企画展／「昭和 100 年」関連企画展示「傷ついた身体でつかった仕事
－戦傷病者 就労への道－」

URL：[開催中の企画展 | しょうけい館 戦傷病者史料館](#)

しょうけい館（東京都千代田区九段北 1-11-5 グリーンオーク九段 2 階・3 階）では、先の大戦で負傷し身体に不自由を抱えた兵士たちの仕事を支えてきた義肢などの道具を展示するとともに、当時の職業訓練や制度について解説し、働くことを通して再起を目指した戦傷病者たちの半生について紹介する企画展を開催しています。



<展示風景（ご提供：しょうけい館）>

しょうけい館（戦傷病者史料館）は、厚生労働省が戦傷病者等の援護施策の一環として、戦傷病者等が体験した戦中・戦後の労苦を後世に語り継ぐ施設として平成 18 年 3 月に開館した国の施設です。館名は、戦傷病者とそのご家族等の労苦を知り、語り継ぐ（承継する）という趣旨から名づけられ、また子供にも親しんでもらえるよう、ひらがなで表記されています。

◆しょうけい館（戦傷病者史料館）

常設展示室（3階）では、戦地で受傷した時に身につけていた実物や、医療・更生などの様々な資料、写真、映像、体験記などで構成されており、実際にご苦労された兵士の方の足跡を辿る形で、入営から戦場での受傷、戦地医療、内地での療養、社会復帰まで、体験された戦傷病者の労苦を伝えています。図書室（2階）では、戦傷病者の体験記・回想録や援護施策関係、医療・衛生史関係などの図書・文献資料を閲覧でき、企画展示エリアの横では戦傷病者の証言を映像で視聴することができます。

このしょうけい館で現在開催されている企画展が、令和8年度夏の企画展／「昭和100年」関連企画展示「傷ついた身体でつかんだ仕事－戦傷病者 就労への道－」。戦傷病者の方々のエピソードと関連する数々の品が展示されています。解説パネルや体験記録を拝見したところ、戦中では国のために身を捧げた尊敬すべき存在として、積極的に職場に迎えることが美德とされていた社会の風潮があったが、戦後を境に変わってしまったということです。社会的な背景として、戦中には、^{しょうけい館じん}傷痍軍人に対して恩給が支給され、1938年には社会の一員に戻れるよう就職支援施策が開始され、国直営の訓練所では、洋服科や家具工芸科、溶接科など計13科が設けられ、ハンディキャップの状況に応じた専門的な職業訓練を実施し、それぞれの仕事に適した義肢や補助具の研究・製作も行われていたということです。しかし、戦後のGHQの占領下において、傷痍軍人に対する恩給や職業保護施策は廃止となり、戦後の混乱の中、大量の復員者や引揚者が国内に戻ってきたことにより、ハンディキャップを持つ戦傷病者の就職難はさらに深刻となり、国は戦傷病者を含む障がい者に対する職業訓練や職業指導、就職あっせんなどの取組みを進めたが、雇用はなかなか進まなかったということです。

企画展エリアの横では、労苦を経験された方々の証言を記録した映像が上映されていました。私が拝見した方は、空襲で失明し、目に弾が入ったまま取り出せず、指も失い、全身に受傷したことから今でも皮膚から破片が出てくる、と50年以上経過（証言記録時点）しても癒えない傷の状況を語られていました。また、都会に出て路上生活を続けながら職を探し、ようやく海軍で培った技術を生かすことができる職を得ても、心無い言葉を浴びせられたり、活躍を嫉んだ先輩から暴行を受けたりと、身体的なハンディキャップにより正当な評価を得ることができなかったことから、周りに認められるために寝る間も惜しんで勉強し次々と資格を取得し、大きな工事を任されるようになり、後に山陽新幹線造成工事の現場所長を務めるまでになった、と戦傷病者に対する不当な就業環境についてお話をされていました。

しょうけい館では、「戦中・戦後の労苦を伝える次世代の語り部事業」を実施しています。戦争体験者の高齢化が進み、戦中・戦後の過酷な体験を後世に語り継いでいくために、20代～70代の方々が3年間の研修を受け、定期講話会や団体見学などにおいて、写

◆しょうけい館（戦傷病者史料館）

真やパネルを使って映像に収められた証言者たちの労苦について説明をされています。訪問した日の週末に開催された講話会に、私も参加してきました。1931年満州事変から終戦に至る歴史を説明するビデオ上映の後、お二人の語り部の方が、身体に不自由を抱えた方や疾病に罹患し差別を受けた方の労苦についてご説明されました。その日の講話会の参加者は約20名、若い方々も多く、真剣に耳を傾けメモをとっていました。語り部の方々がご自身のご経験を踏まえつつ、それぞれの言葉で思いを伝えていただけることによって、証言映像を見ただけでは気づけない視点や学びを得ることができ、語り部による労苦承継の効果と必要性を実感することができました。

観覧者に配布されている「戦傷病者とその家族の体験記」にも、労苦が綴られています。「外傷ではなく内科疾患であることに対して劣等感を持つ」「左手を切断し入院していたところ婦人会の見舞いがあったが、軽傷であることが恥ずかしくて病室から出る」「戦中、傷痍軍人と結婚するにあたり、苦勞すると言われ、本人も人並みの作業ができず嫌味を言われた」「戦中は戦死者や戦傷者は讃えられたが、戦後は汚いものを見るような目で見られた」「戦中は「白衣の勇士」として称えられたが、戦後は街頭へ身をさらさなくてはならなかった。「白衣の勇士」の自衛手段に誰が文句を言えたであろうか」「雑踏で義手が通行人に引っ掛かり、罵声を浴びせられたり、戦傷であるからたくさんお金をもらっているだろうと冷たく言われ、自暴自棄になる」（一部要約）。当時の社会環境と価値観に、ただただ驚くばかりです。

私は広島出身ということもあり、原爆については幼少期より両祖父から、また学校教育でも学ぶ機会がありましたが、戦後の平和な国内における戦傷病者の労苦についてはあまり認識がありませんでした。新宿区立の学校に通う私の子供は、学校の授業でしょうけい館を訪れたことがあったようですが、設置年を踏まえると私と同様に成人の多くは訪れる機会を得られていないのではないのでしょうか。過去の労苦や価値観、社会の在り方を顧みることは、令和の現在に生きる我々がより良き社会を模索していく上で、重要な学びとなると思われます。価値観は時代とともに変わる、社会制度は不断に見直され改善されることが必要。当たり前のことですが、改めて強く認識しました。しょうけい館では定期的に企画展が実施されています。「昭和100年」を機に、またあらゆる機会を捉えて、多くの方がしょうけい館に足を運んでいただければと思います。私も、再訪したいと思います。

会期：令和8年6月2日（火）～令和8年8月30日（日）

主催：しょうけい館（戦傷病者史料館）

住所：東京都千代田区九段北1-11-5 グリーンオーク九段2階・3階